

がかかりそうですのでこのへんで筆をおきます。

(才六回生 東大大学院)

フィラデルフィアから

塚越道子

諸先生を始め、各方面で御活躍の先輩の方々並びに研究に暇なき在校生の皆様、お元気でいらつしやいますか、お伺い申し上げます。

さて何か書けとの仰せですが、4日の余裕では不勉強の私に地理学的なお話は到底無理ですので、私のおります Philadelphia 四方山話でお許し下さいませ。

Philadelphia は Pennsylvania 州の東南端に位置し、人口約 22.8 万、面積 349.5 km² で New York, Chicago に次ぐ大都市だったが近年著しく発展を遂げた Los Angeles により4位たるを余儀なくされるに至った。New York 州に源を発する Delaware 川の西岸に当り、川は此処より約 120 km 南下し Delaware 湾に注ぐ、この川の対岸は New Jersey 州で Philadelphia と Camden 市を結ぶ橋は 480 m である。一方 Schuylkill 川が市内を蛇行し、Delaware 川に注いでいる。

Philadelphia はこの二河川の作った氾濫源の上にできた町で、従つて Tide level より低く、低湿地であつたが、現在堤防を築いている。殊に二河川に囲まれた地域は市の中心で、高度約 12 m、北～北東部に向け漸次高度を増し、なだらかに起伏する。市の最も高い所で約 152 m である。

Schuylkill 川の氾濫期は年に二度あり、激しい雷雨の後に時に 12 時間も続く事がある。又異常な高潮により、Delaware 川の逆流をみる事がある。水深約 10~12 m である。去年は稀にみる涼しい夏だつたというが、暮から今年にかけて 75 年ぶりの悪天候にみまわれ、連日最低気温が華氏でマイナスを続けた程であつた。積雪も一回に 30 cm は普通で、消える間無しである。一般に湿度は高く、降水量は年を通じ大體平均に分布する。

Philadelphia は William Penn と切りはなして考えられない、Philadelphia は Pennsylvania の首都であり Pennsylvania は Penn のものであつたからその由来について、次のような記録がある。

W. Penn は父親が政府に調査した 1 万 6 千 希の代償として 1681 年 Charles II から米國に土地を与えられた。敬虔な Quaker 宗徒の彼は、その地が Wales の如く丘陵地と聞き "New Wales" と命名しようとしたが、Wales 出身で anti-Quakers の大臣が反対した為、彼は再度 "forest land" の意のラテン名 "Sylvania" を申しでた所、王はこれに Penn の名を冠し、Pennsylvania と命名した。

翌 1682 年 Penn がこの地に赴くや、細分されていた集落の外郭を決め、この町を Philadelphia (ギリシヤ語で "City of Brotherly Love") と名付け、道路を拓き、1701 年には市として認められた。彼は 1682~83、1699~1701 年と 2 回に亘りこの地を訪れているが、最後に本國に強制送還される迄、彼の治世は実に公平な処置と、正に平和的に友好的に Indians と共存していくという決意に基くものであつた。

幸実、Penn が 1699~1701 年迄住んでいた the Pennsbury Manor と呼ばれる館には、大勢の Indians が訪れていたし、この又となき栄光の瞬間を、Penn お抱えの画家 Benjamin West は彼の絵筆で高らかに唱い上げている。これ等の絵に描かれた Indians の頭髪や服装から、私は、Iroquois Indians の Mohawks 族等ではないかと思うが、詳しく文献に當つていない故、勿論お叱りを覚悟している。先頃この館を訪れた所、Penn の時代その儘に再現してあるという、この家の室の木壁には所々拳大の穴があつて、それを頼りに下僕が屋根裏の寝床へ 90 度の傾斜をクライミングしたと思われる手摺、靴跡さを何か衰れで、彼の愛したという庭園の花がひとり美しく咲いていたのは、"まなしとして……" の風情であろうか。

先述のように最初 Philadelphia に植民地を確立したのは 1681 年英國就中 Penn の率いた Welsh Quakers が主であつたが、これより先 1636 年に、スウェーデン人による小集落が点在し開かれていたが彼らは、Penn の町に併合された。続いて Church of England (Episcopalian) の人口がやってくる。両者の間に、政治的或いは經濟的な競争が激化した。170 末のことである。180 に入るや German Mennonites や German Quakers が更に加わり、その後 20 年間に、German Moravians が宗教上の理由で追放されやつて来たが、これ等の独逸人はやがて市の西部や Schuylkill 川の谷に移り、市内には僅かに残つた。

一方、Penn は又腕の良い取人を求め Scandinavia, Holland, Germany, Switzerland, Scotland, Ireland, England 等から多勢招いており Ireland の北から Scotch-Irish Presbyterians がやつて来たのも

1720年の事であつた。19Cの初め、砂糖栽培の急激な衰退により、*West Indians* も流れて来た。独立戦争後の *Philadelphia* の役人は主に英国人で占められたが、その為驚くべき発展を遂げ、合衆国への多くの移民を受け入れ *Catholic Irish* を手始めに、1848年には独逸から、更に伊太利から受けている、現在市内に *german town*, *Italian Market* 等一帯を成し、顕著な名残りを止めている。即ち *Philadelphia* の初期の移住者の広束と特徴は又、宗教に伴うそれでもあつたが、現在では、世界各国から広く集り、大体全人口の $\frac{1}{2}$ が外国人である。更に多くの黒人達を忘れることはできない。勿論最初は奴隷としてやつてきたが、後に *Philadelphia* が及奴隷制の中心となつた為、漸次集まり、1950年センサスで30万を超え現在増加の一途を辿つている、或いは宗教的に相容れぬ理由で放浪の民となつたユダヤ人も安住の地を求めて集まり現在33万以上を数え、*Philadelphia* の父 *Penn* の描いた夢“宗教的にも人種的にも完全なる自由”は、今尚生きている。

こうして *Philadelphia* は *Boston* と共に米國植民地の中心として、米國と共に歩み、発展して来たといつても過言ではないだろう。1776年7月4日の独立宣言、1787年憲法発布、1789年オノ国会、1775~1800年、連邦政府首府となるなど、米國最大の都市として、他に追従を許さなかつた。エリー運河開通後 *New York* が抬頭する迄、*Boston* と共に *U. S. A.* の二大港として活躍し、背後の *Pennsylvania* 炭田や油田を控え紡績、毛、絹織物等繊維工業、或いは、船舶、車両、機械、航空機等主な重工業が発達している

又静かな文化都市としても重要である、週日未日し黒い肌の宿命をアピールした *Marian Anderson* や、常任指揮者 *Leopold Stokowski*, *Eugene Ormangy* を擁する *Philadelphia Orchestra*, 或いは音楽を志す人々のメッカ“*the Curtis Institute of Music*”もその名を世界に誇っている。

(オハ回生、在フィラデルフィア)

地理研究会創立とその一年

地理研究会会員

春もたけなわの四月、誰もがなんとなく野山へ出かけたくなつていた。しかし、ひとたび巡検を経験した地理学生にとつて、ありきたりのハイキング